

団体名 もっと伝統工芸備中漆展実行委員会	代表者 池田一二三	記載者 藤井茂樹
所在地(市区町村名のみ) 新見市西方361番地 新見美術館内		
活動目的 備中漆の利活用をいかに図っていくか、新見産の備中漆を使った作品制作により、質の良さと漆の活用方法を探ることを目的とする。		
団体の紹介 平成26年の「もっと伝統工芸備中漆展」開催時につくられた実行委員会で、第1回展では、岡山県立美術館と備中うるし利活用協議会が中心となりメンバーを構成。第2回展は、真庭市勝山のひしおホールと備中うるし利活用協議会によりメンバーを構成。今展の第3回展は地元の新見市、新見市教育委員会、新見美術館と備中うるし利活用協議会、岡山県郷土文化財団でメンバーを構成。同委員会には別に運営委員会を設置し、運営委員と美術館で展示会の構成や運営を行う。		
助成を受けての活動内容 備中漆復興20年を記念し、平成26年に岡山県立美術館ではじまった「もっと伝統工芸備中漆展」の第3回展として、漆の産地である新見市で開催を計画。今回は、日本工芸会中国支部の漆芸・木工会員及び新見市で活動する「漆芸」の地域おこし協力隊に出品協力を依頼。岡山県、広島県、島根県在住の28作家の賛同があり、新見産の漆を無償提供し、作品制作を依頼した。今後の備中漆の利活用を考える上で、今回の新見産の備中漆を使っての制作された作品を記録するため、図録の制作を計画。11月末、新見美術館に作品を搬入、12月末までに順次作品撮影を行う。その後、展示会オープンまでの間、図録制作の準備をすすめる。運営委員や新見美術館学芸員などにより作品による色校正などの調整を行う。図録の巻頭論文には、これまで20余年にわたり備中漆の復興に携わって来られた高山雅之氏に巻頭論文を、第1回もっと伝統工芸備中漆展を開催した岡山県立美術館主任学芸員・福富幸氏に「第3回備中漆展によせて」の寄稿文を依頼した。図版ページには漆芸家9名、木工芸家18名、地域おこし協力隊2名、磯井正美氏、太田儔氏、北村昭斎氏、川北良造氏の間人国宝4作家に故難波仁齋を加えた34作家37点を掲載。作家略歴をはじめ、今回提供した備中漆を使っての感想、新作へのコメントなどを掲載。今後の備中漆利活用への資料として活用できる内容とした。図録は出品作家への贈呈をはじめ、県内の図書館、美術館、博物館、関連施設などに贈呈した。また展示会では新作28点を中心に、旧作も含め34作家58点を展覧。充実した内容の展示会となり、多くのファンを魅了した。会期中には週末を中心に作家の作品解説や記念講演会、漆によるワークショップなどを開催。多くの参加者があり、大変な反響があった。		
助成を受けての成果 新見市がこれまで力を入れてきた漆の復興。今回、新見産漆を使い制作された新作を中心に備中漆展を地元新見美術館で開催できたことは大変意義があったと思われる。備中漆の利活用には課題も多いが、出品された作品により質の高さは実証されたものと思われる。今回の新作を図録に掲載できたことは今後の研究に役立つとともに、備中漆の質の高さを再認識いただけたと思われる。		
今後の活動の課題点 平成30年度から国宝や文化財の修復にはすべての工程で国内産漆が使用されることになっており、漆の生産量の増産も予想されることから、備中漆を地域ブランドとして全国に売り出し、いかに安定した需要と供給をはかっていくか、行政、企業、地域、研究者、作家など関係者が一丸となって、今後もさまざまな方面での試みや研究などが行われる必要があると思われる。		
問い合わせ連絡先もしくは、ホームページアドレス(加入希望の方などへのお知らせなど) もっと伝統工芸備中漆展実行委員会 新見市西方361番地 新見美術館内 電話0867-72-7851		

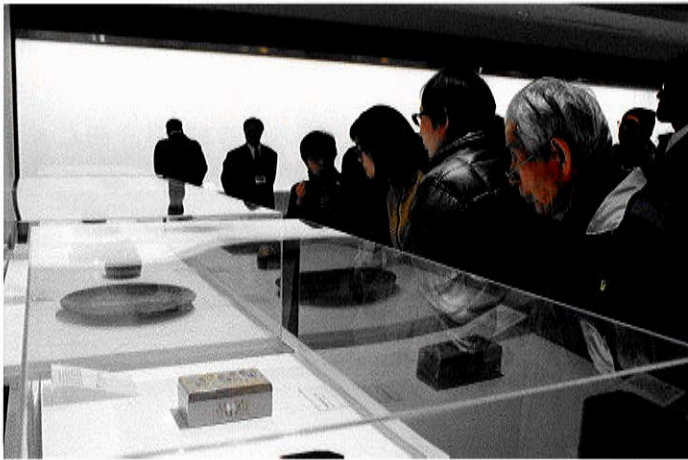
※ このページは、財団ホームページや印刷物などで公表される資料として使用される場合があります。A4用紙1枚程度におまとめください。(他の報告書との重複可)
写真・チラシ・パンフレット(PDFもしくは、画像)等を添付していただいても結構です。



備中漆展記者会見風景



備中漆展開会式テープカット



オープニングギャラリートーク風景



オープニングギャラリートーク風景



展示風景



記念講演会風景